

研究主題 「日本の伝統的な礼法とスポーツの融合授業

～マナーキッズプロジェクトの紹介～」

教育実践学部門 担当 友末 亮三 小川 麻里

ねらい

マナーキッズプロジェクトのプログラムは、子どもの体力・運動能力の低下に歯止めをかける「体育」、挨拶・礼儀作法の基本的マナーとスポーツマンシップを習得させる「徳育」、運動で知性を育む「知育」を考慮して組まれている。テニスを通じて行うプロジェクトは、ミニテニスの技術指導を受ける中でマナーや礼儀を学習していくというもので、これまでも幼稚園児、小学生、その保護者、テニスの指導者、学校の先生などを対象に全国各地で行われきた。このマナーキッズテニス教室は、日本人が長い歴史の中で培ってきた礼儀作法の真髄に触れる機会になるのではないかと考え、本学園においても幼稚園児・小学生を対象に実施することにした。本公開研究会では、子どもが楽しく夢中になれる活動を通して、望ましい学習態度を身に付けさせることの効果も検証した。

研究会の概要

- 1 日 時 平成22年10月9日(土) 10:00～12:00
- 2 場 所 安田女子大学体育館
- 3 講 師 田中日出男(NPO法人マナーキッズプロジェクト理事長)
小川美子(小笠原流礼法師範)
- 4 受講人数 安田幼稚園園児14名、安田小学校生徒27名、保護者30名、
安田女子大学学生18名、教員9名。
- 5 後 援 広島県テニス協会 広島市テニス協会

指導の実際

[1] 開講式

マナーキッズプロジェクトは、子どもたちの自己紹介から始まる。講師の田中理事長によると、「日本全国どこの子どもも姿勢は悪く、小さい声でしか自己紹介できない」とのことだが、本公開研究会でもその通りであった。続いて小笠原流礼法小川師範に、正しいお辞儀・挨拶の仕方を指導してもらう。

姿勢を正し、お腹に力を入れ、胸にいっぱい空気を入れ、「よろしく申し上げます」と言ってからお辞儀をする。

お辞儀は頭を下げるのではなく腰を折り、心を下げる。

お辞儀が終わったら、やさしい顔で相手の顔を見る。

この3点を繰り返し練習した上で、テニスの練習に入る。

[2] テニスの練習

ショートテニスを作りながら、約90分間「よろしくお願いします」「ありがとうございました」と、繰り返し挨拶の練習をする。子どもたちは、10分経過するごとに姿勢が良くなり声も大きくなっていく。ラリーが何球続けられるかという練習では、達成可能な目標を設定し、達成するとコーチと握手し報告させる。



[3] 小川師範のマナー講座

子どもたちがプレイしている間に、保護者に対して小川師範からの講話が行われた。挨拶というのは目下から目上にするものだから、朝は子どもから「おはようございます」と敬語で言わせなさい。親は子どもの顔を見て「おはよう」で返したいものだ。また、子どもを叱る際には、親は上座、子どもは下座ですと効果が上がる、という話をされた。



[4] 後片付け

テニス教室が終わると、全員で体育館の雑巾がけをする。どの子も雑巾がけを苦にするどころか喜んで行っており、子どもの心に何か変化が起こっているように感じられた。

[5] 閉講式

相手の目を見てお礼を言うことができるようにするために、修了証書の授与が行われた。賞状の受け取り方を教え、しっかり相手の目を見て「ありがとうございます」と言って、いい顔で握手することを教える。そして、最後は、マナーキッズテニス教室の集大成の意味合いで、子どもたちは一人ずつ指導者一人一人に、きちんと立って、きちんとお辞儀をして「ありがとうございました」と言って握手をする。この日の子どもの変化が目の当たりにでき、疲れが吹っ飛んだ瞬間であった。

[6] 感想文提出

参加した子どもたちには、感想文を後日提出してもらった。どの子もマナーキッズテニス教室の内容は心に響いたようで、しっかり書いてあった。

みんなすごくがんばってました。あいさつもよくなりました。つぎがあったらいい

いです。(1年生男子)

さいしょはなにかとおもっていたけど、ていねいにおじぎをすると、ほんとうにこころがきもちよくなりました。(1年生女子)

あいての目を見てあいさつをするのがはずかしかかったけれど、何回もれんしゅうすればできるようになりました。(2年生男子)

今頃の若者は礼儀を知らないと言われてから久しいが、礼儀正しさのDNAは日本人にはまだ残っていることが確信できた。

まとめ

かつて我が国を訪れた世界各国の人々は、日本人の礼儀正しさ、立ち居振舞いの素晴らしさに感嘆の声をあげたとのことである。しかし、戦後わずか60年の間にその良さは減少し、今ではマナーや道徳を唱えるだけでは何も変わらない社会になりつつある。「優しく剛く」を学園訓とし、人間教育の推進を重視する本学でさえ、大学のスポーツ施設を利用する安田女子中学・高校の生徒たちの多くは、知っている人にしか挨拶をしないし、引率の先生もそれを注意しているようには見えない。安田女子大学・短期大学に至っては、教職員に自分から挨拶をしない、授業中の私語が途絶えない、ごみを教室に散らかす、隠れて喫煙をする・・・など、一部ではあるが首をかしげたくなるような態度の者もいる。

そのような状況の中で、マナー指導における具体的でしかも効果のある方法を提示するマナーキッズプロジェクトには、子どもだけでなく大人も勉強になる点がたくさんあった。田中理事長の「授業は第1回目の最初が肝心である。子どもはこの先生はどこまでルーズになっても怒らないか一瞬のうちに見抜く。したがって教員は...」という発言のくだりなどは、私語に困っている教員にとっても、参考になる部分であった。保護者および教員からの感想も一部紹介しておこう。

いつも人見知りをする娘が大きな声で挨拶をする姿を見て、参加してよかったなと心から思いました。(2年生保護者)

挨拶では言葉を言った後に礼をするんですね。親が知らない事を子どもができる訳ありません。大人がお手本になり、正しいマナーを伝える姿勢がとても大切だと感じました。(2年生保護者)

今回、小笠原流の礼の仕方を教えていただきましたが、小学校で行っている安田式の礼について、もう一度ルーツを調べたり考え直すよい機会となりました。このような機会に、学園全体で考えてみるのもよいのではないのでしょうか。(安田小学校山本校長)

過去にこのプロジェクトを何度も開催した人からは、このような道徳的な教室を繰り返して行おうとすると、「押し付け教育だ」とか、「スポーツは本来は遊びであって、礼儀の指導を持ち込むべきではない」という批判が出ることがあると聞いた。しかし、授業にどの程度取り入れるかは、礼儀作法の基本やその歴史を知った上で判断すべきであり、取り入れる状況は人それぞれ異なっていて構わない。このプロジェクトでは、スポーツ

の指導をしながらマナーの指導が行われるが、スポーツと礼法とを融合させること自体を目的としているのではない。スポーツをきっかけに、望ましい学習態度や人間関係を作ることを、最大の目的としているのである。

このマナーキッズプロジェクトが参加者に与えるインパクトは、非常に大きいものがある。しかし、そのあとで放っておいたらせっかく覚えた正しい挨拶の仕方がなくなってしまう場合もあるとのこと。できれば近いうちに、教職員も対象に正しい挨拶の仕方を学んでもらう講習会として開催することも考えてみたい。

謝辞

本公開研究会の趣旨にご賛同いただき、貴重なお時間を割いてご協力いただいたNPO法人マナーキッズプロジェクトの田中日出男理事長、小笠原流礼法小川美子師範に深く感謝申し上げます。

また、小学生を多数集めて下さいました安田小学校山本勝也校長、幼稚園児の参加をいただきました安田女子大学附属幼稚園圓光寺美奈子園長、コーチとして参加していただいた安田小学校新本惣一郎先生、新田哲之先生、安田女子大学附属幼稚園、三上留美先生、宮本沙紀先生、安藤史佳先生、安田女子大学テニス部員、生活デザイン学科友末ゼミ生一同、児童教育学科小川ゼミ生一同、後援団体の調整をしていただいた中国テニス協会津島則之理事長、会場整備をしていただいた生活デザイン学科、児童教育学科のみなさま、まことにありがとうございました。

